心肺蘇生法に神様は必要か？

「うへぇー、事実と違うところが多いですねぇー」

　ザックリとではあるが、俺の話を聞いた妖精モドキの第一声がこれだった。

　まあ、作り話だからそうだろうっちゃそうだろうが……何故だろうか。やれやれと首を振る妖精モドキを見た俺の、一番最初に思ったことはというと、

　すっげーイラっとくる。

　であることは火を見るより明らかであろう。こいつの表情、仕草、声……どれが一番腹立つかを決めることは困難であり、強いて言うならば全部同率一位だというのが最も正解に近い。

「特に、神様のエピソードとかあれですよ。冒涜に近いですね。名誉毀損で訴えられても文句は言えないです」

「何故冥府出身のお前がこの世界の法を知っているんだ……」

「失礼な。冥府にだって法はあります！」

　プクぅっと頬を膨らませる妖精モドキ。しかし、そんなことより、さっきから気になっていることがある。騒がしいというかなんというか、どこか形容し難い『何か』が俺の胸の内側から沸き上がってくる？　いや蹴りつけてくる？　のだ。うん。分からん。だが、これだけは言える。

　ああ、こりゃあ妖精モドキの言っていた『神への冒涜』で怒っているんだな、と。

　まあ、気持ちは分かるぞ。俺だって、自分の知らないところで『プレイボーイ』とか『たらし』とかのレッテルを貼られていたら怒り心頭になるだろうからな。だが、そのレッテルを貼ったのは俺では無くギリシャ人なので、俺に八つ当たりのようにクレームをつけてくるのは是非ともやめていただきたい。

「大体、ゼウス様とハデス様が仲悪いってどういうことですか？　あの二人はちょー仲いいですから。あれです。傍から見てると、双方とも自立出来るか心配になるレベルですよ？」

　刹那、俺の胸の仲が暴れだす。うん、これは『暴れだす』で正しいな。俺の中にいなけりゃ、多分妖精モドキはボッコボコにされているだろうって分かるくらいだ。こんなちっこい奴に『ブラコン』呼ばわりされたら、そりゃこうなる。これは妖精モドキが悪いな。

　しかしあれだ。俺の中にいる神様ってのは、随分とおつむが悪いみたいだ。どう考えても俺は何も悪くないのに、何故こうもダメージを受けるのが俺なのだろうかと、小一時間問い詰めてやりたいくらいである。

　あ、また騒ぎ出した。

「で……一応説明したが」

　これ以上この話をしていると無駄にダメージを受けそうなので、とっと本題に戻す俺。

「で？　その『ゲート』ってのは、誰が作ったんだ？」

「間違いなくハデス様ですね」

「なる程。分かった。てことは……その先の話も、取り敢えず俺には理解出来たな。要は、ハデスが『ゲート』を作って、お前等とあのテュポーンが『ゲート』を潜ってきたわけで……多分、『ゲート』がハデスしか作れないっていうのは、タンタロスも知っていることなんだろう？　つまり、お前等二人が勝手にこの世界から出ることは不可能なことは明白で、タンタロスがハデスの作った『ゲート』を使って、あのテュポーンの仲間をこの世界に送り込む可能性は非常に高い。この認識でいいか？」

　俺がそう聞くと、妖精モドキは黙って頷いた。心なしか、どこか表情が曇ったのを俺は見逃さない。

　こいつもこいつなりに、この世界に迷惑をかけることには責任を感じているってことか。俺には『死んでくれ』とか言ったくせして……いや、『心臓を止めてくれ』だったな。

「なあ、ふと思ったんだが、その『ゲート』とやらは、ハデスが閉じたりは出来ないのか？」

　そうしてくれるのならば、この世界に奴等がやってくることもないだろう……が。

　分かっちゃいたが、妖精モドキは首を振った。

「それが出来るのであれば、そもそも『ゲート』が開いていることなんてなかったと思いますよ？　何せ放っておけば、何時そちらの世界にこちらの世界の生物が迷い込むか分かりませんからね。あの混戦の中、ハデス様がゲートを開いてくれた、とは思えません。まさか、簡単に開けるようにはしていないでしょう。『ついうっかり』で開けてしまわないように、面倒な開け方にしているはずですからね」

「ま、だろうな」

　つまり、作ったまま放置されているってわけか。そうだろうとは思ったが、こりゃ、また昨日のテュポーンみたいなのと一戦交えないといけないとなると、溜息を吐かずにはいられない。

「『ゲート』うんぬんかんぬんについては、一旦ここで話を止めましょう。詳しいことはハデス様に聞く必要がありそうですからね」

　妖精モドキの言葉に、俺も同感だ。今の段階では、『ゲート』については憶測の域をでないし……何より、今重要なのはそこじゃない。

「なら、話を最初に戻す。さっきお前は『七人の神様を探す』って言っていたけど……具体的にはどうするつもりだ？」

　そう。重要なのはここだろう。『神様を探す』というのが、現段階での妖精モドキの計画のはずだ。

「取り敢えず、全員まだ殺されていないと仮定するが、それでも捕まっている可能性は高いだろう？」

　俺の問いに、妖精モドキは頷く。

「なら、『探す』も何も、その七人がいる場所は地下牢とか、そんな場所の――」

「いえ。多分、一箇所に集めている、なんてことはしていないはずですよ？」

　俺の言葉に被せるように発せられたその妖精モドキの発言は、俺を驚かせるのには充分なものだった。「どういうことだ」と説明を求める間もなく、妖精モドキは続ける。

「冥府にいる神の力や能力は、神様同士の距離が近ければ近いほど強まるんです。しかも冥府にいるなら、神同士の心を合わせさえすれば、例え世界の反対側にいようとも、ほとんどフルパワーに近いものが出ます。神七人がフルパワーを出せば、牢獄だろうがなんだろうが、簡単に逃げられますし、寧ろタンタロスに反撃もできますよ。あの時は奇襲で心を合わせる余裕もなければ全力も出しづらい状況でしたが、それも短時間のことだったからこそ。牢屋かどこかに閉じ込められれば、そのうち心を合わせることも可能でしょう。で、これはタンタロスも知っていること」

「なる程。つまり……」

「ええ。捕らえられた神は、少なくとも冥府にはいないでしょうねぇ」

　妖精モドキは、不敵な笑みを浮かべて力強く頷いた。

「七人の神は、冥府以外のどこかに幽閉されていると見て間違いないですよ。しかも十中八九、この世界のどこかでしょうね」